

イラク

世界各国の信教の自由に関する 2007 年版年次報告
民主主義・人権・労働局公表

イラクは、18 の県すなわち「知事の治める行政区」からなる、共和制、連邦制、多元主義の統治制度による立憲民主主義である。憲法は、イスラム教を公式宗教として認め、イスラム教の確立した規定に反するいかなる法も制定することはできないとしているが、思想、信教、宗教心および宗教行動の自由も保証している。

政府は通常これらの権利を支持したが、不安定な状況が国内各地での効果的な統治を妨げ、宗教の自由を保護する政府の能力は、反乱、テロ、宗派がらみの暴力によってハンディを負った。

政府が示した宗教の自由を尊重する状況は、この報告書が扱う期間中に変化はなかった。2003 年以来、政府は通常いかなる宗教グループの迫害も行わず、かわりにすべての宗教的少数派に対する寛容と容認を公約として掲げている。しかし、いくつかの政府機関は、バハーイー教やイスラム教スンニ派のワッハーブ派に対する長年にわたる差別的な慣行を続けた。

イスラム過激派は、イスラム教の教えの過激論者の解釈に従うように、他のグループに途方もない圧力をかけ続けた。加えて、礼拝所の襲撃を含む頻繁に起こる宗派がらみの暴力が、宗教を自由に実践することを妨げた。この宗派がらみの暴力は、第 10 代と第 11 代のイマームの霊廟がある、世界でもっとも重要なシーア派モスクの 1 つである Samarra の al-Askariya モスクの 2006 年 2 月 22 日の襲撃で、さらに悪化した。

米国政府は、人権を促進するための全体的な政策の一環として、宗教の自由に関する問題について政府と議論している。米国政府高官および大使館員は、宗派がらみの暴力に際し団結を求め、政治過程に宗教的少数派を含めることを支援した。

セクション I 宗教統計

増加する暴力、国内人口移動、政府の能力の欠如により、統計は出所によって異なっている。数字はたいてい、センサスデータあるいは他の政府統計よりもむしろ、非政府機関

(NGOs) の推測である。政府統計の場合は、その旨を記している。

国は、437,072 平方マイルの面積と 2,750 万の人口を有している。人口の 97 パーセントはイスラム教徒である。シーア派イスラム教徒（主にアラブ人であるが、トルクメニスタン人、ファイリ（Faili）・クルド人および他のグループも含んでいる）は、60 から 65 パーセントの多数派を占めている。スンニ派イスラム教徒は人口の 32 から 37 パーセントを占め、そのうち 18 から 20 パーセントがスンニ派クルド人で、12 から 16 パーセントがスンニ派アラブ人、残りがスンニ派トルクメニスタン人となっている。残りの 3 パーセントは、カルデア教徒（東方典礼カトリック教会）、アッシリア人（東方教会）、シリア人（東方正教会）、アルメニア人（ローマカトリックおよび東方正教会）、プロテスタント、加えてヤジーディー教徒、サービア・マンダ教徒、バハーイー教徒、シャバク、カカイー教徒（Kirkuk とその周辺にいる小さな諸派統合の宗教グループ）から成っている。シーア派は主に南部にいますが、Baghdad でも多数派であり、国のほとんどの場所にコミュニティを持っている。スンニ派は国の中央部と北部で多数派を作っている。

1987 年の公式センサスによると、国内には 140 万のキリスト教徒が生活していた。現在の推定では、キリスト教徒の数を 100 万以下として、その多数をカルデア教徒が占めている。2006 年 8 月、Baghdad のカルデア教会 Andreos Abouna 補佐司教は、2003 年の侵攻以前に国内にいた推定 120 万のキリスト教徒のうち、600,000 人のみが残ったと述べた。教会指導者によると、国のキリスト教人口の推定 30 パーセントは北部にいて、最大のキリスト教コミュニティが Mosul、Erbil、Dohuk、Kirkuk にある。

アルメニア教区の大司教は、19,000 のアルメニアキリスト教徒が国内、主に Baghdad、Basrah、Kirkuk、Mosul に留まったと報告した。アルメニアキリスト教徒の人口は、前回の報告期間の 22,000 人から減少したといわれている。

ヤジーディー教指導者は、国内の 600,000 ヤジーディー教徒のほとんどが、北部の Dohuk および Mosul 近辺に住んでいると報告した。シャバク指導者は、国内の推定 200,000 のシャバクが、主に北部の Mosul 近辺に住んでいると述べた。

サービア・マンダ教徒のコミュニティは引き続き減少し、サービア・マンダ教徒指導者によると、前回の報告期間の 10,000 人から減少し、5,000 から 7,000 人が国内に留まった。時に Ahl-e Haqq と呼ばれるカカイー教徒は、主に Kirkuk、Mosul、Diyala 県の Kankeen に住んでいる。ほとんどがクルド民族である。

礼拝あるいは儀式への積極的な参加に関するデータはなかったが、テロ攻撃が多くのモス

ク、教会や他の神聖な場所を使用不可能にした。多くの礼拝者は、暴力の脅威により、礼拝に行かず、あるいは宗教行事に参加しなかったといわれている。それらの脅威によって閉鎖された礼拝場所に関する多数の報告があった。

政府は、旅行経路を準備し、巡礼者のサウジアラビア入国のための予防接種の書類手続きを手伝うことで、メッカへの巡礼に多大な支援を提供した。政府はまた、スンニ派およびシーア派のワクフ（waqfs）すなわち宗教的基金に資金提供をしており、そこが大衆からのメッカ巡礼申請を受け付け、それを最高裁判所へメッカ巡礼のために提出した。首相官邸付属の評議会は、提出された申請の中から正式なメッカ巡礼ビザのために巡礼者を選ぶ抽選を行った。

セクション II 宗教的自由の状況

法的、政策的枠組み

憲法は、宗教の自由を与え、政府は通常この権利を支持した。しかし、他の法律規定がこの自由に制限を加えている。

憲法第 10 条は、聖地および宗教的な場所の尊厳を保証し、維持すること、ならびにそこで儀式の自由な実施を保証する国の公約を定めている。憲法の第 43 条は、あらゆる宗教グループおよび宗派の信者は、儀式の実施および宗教的基金、宗派業務、宗教組織の管理を自由に行えると述べている。第 43 条の第 2 項は、礼拝の自由と礼拝場所の保護を明確に保証することで、これを反復している。

あらゆる宗教グループが自由に集まり、礼拝する権利を守るのが政府の政策である。しかし、実際には、進行中の反乱が、多数の市民のこの権利を行使することを妨げている。

憲法は、一般的に、宗教の自由を与えているが、国のイスラムアイデンティティに非常に集中している。イスラム教を国の公式宗教として認める憲法の第 2 条は、イスラム教が立法の源であるとみなすことを要求し、その広く合意されている教義に反するいかなる法も制定できないと述べている。

しかし、第 2 条の第 2 項は、民主主義の原則、あるいは思想、信教、宗教心および宗教行動の自由の権利を含む基本的な自由に関与するいかなる法律も制定できないと明記している。憲法の第 14 条は、性別、人種、民族、国籍、出身、肌の色、宗教、宗派、信仰、主義あるいは経済的社会的地位による差別なく、市民は法律の前に平等であると定めている。第 41

条は、市民が、各自の宗教グループ、宗派、信仰あるいは選択にしたがって、自分の個人的地位を全うすることは自由であるとしている。

政府は、2003 年 8 月に連合暫定施政当局のもと宗教省が解散された時に結成された 3 つの waqfs、すなわちスンニ派、シーア派、キリスト教および他の宗教の宗教的基金を維持している。首相官邸の権限のもとに運営されている基金は、宗教施設を維持するために政府資金を受け取っている。

政府は、公立学校における宗教についての教育を認めている。国のほとんどの地区では、初等および中等両方の公立学校のカリキュラムに、卒業の条件としてのコーランの学習を含む、週 3 コマのイスラム教育が含まれている。宗教学は、北部では必須ではない。全国の子供は、公式にはイスラム教に参加する必要はないが、一部の非イスラム教の子供は、参加するようにとの圧力を感じていると報告した。この報告期間中、政府認可のもと運営されている私立の初等あるいは中学校はない。

アシュラ、アラバイン (Arabai'n) イード・アル・フィトル (断食明けの大祭)、イード・アル・アドハー (犠牲祭)、マウリド・アン・ナビー (預言者 Muhammad の生誕祭) を含む多くのイスラム教の祝祭日は国の祝日でもある。国の祝日、ノウルーズ (Nowruz、春分の日) は、バハーイー教による祝祭日として祝っている。キリスト教徒は、クリスマスとイースターは国の祝日ではないが、政府の政策が両祝日を祝う権利を認めていると報告した。

国の民法には、改宗に対する刑罰はない。イスラム法では、イスラム教から他の宗教への改宗は死罪である。しかし、1969 年の刑法 111 号の第 1 条は、犯罪の刑罰は民法のみによって科すことができると指示している。改宗に対するシャリーアの刑罰にもかかわらず、刑法はシャリーアの刑罰を導入せず、また同様の刑罰も含んでいない。1972 年の民法 65 号は、非イスラム教徒のイスラム教への改宗を明確に認めている。憲法は、法律で規定されているように、市民が、各自の宗教グループ、宗派、信仰あるいは選択にしたがって、個人的な地位を全うすることは自由であると定めている。

2001 年の革命指導評議会 (RCC) 決議 201 号は、イスラム教のワハビ派を禁止し、罪が証明された場合、信奉者に対して死刑を義務付けている。1970 年の法律第 105 号は、バハーイー教を禁止している。新憲法における宗教の自由に関する条項は、これらの法律に取って代わるかもしれないが、この報告期間の終わりまでに、それらを無効にする裁判所への異議申し立てや、それらの廃止を提案する法律は出されていない。

パスポートには、個人の宗教を載せてはいないが、国民 ID カードには、所持者の宗教を明記している。

2007 年 4 月、内務省の国籍パスポート部は、バハーイー教を名乗る者に対する国民 ID カードの発行を禁止する 1975 年の規則 358 号を取り消した。それ以来、少数のバハーイー教徒が 2007 年 5 月に ID カードを発行された。この公式の国籍カードがないことで、バハーイー教徒は子供の学校への登録やパスポートの申請での困難を経験していた。この取り消しにもかかわらず、この報告期間の終わりの段階で、1975 年に規則 358 号が制定された後に ID 記録を「イスラム教」に変えたバハーイー教徒は、未だバハーイー教を示す ID カードに変更できていなかった。

2006 年 3 月の国籍法は、かつて国籍が取り下げられた場合、国内ユダヤ人が国籍を再取得できないと明確に定めている。

1959 年の個人地位法は、問題に関する条文がない場合、シャリーアの法律への組み込みを求めているが、第 2 条 (1) は、「特別法」で扱われる申請者を明確に免除している。その特別法は、1917 年の英国宣言第 6 号および 1931 年の外国人の個人地位法第 38 号を含む。宣言第 6 号は、民事法廷が該当する宗教法に基づく意見を非イスラム教当事者の宗教機関に求め、その意見を法廷で適用すると規定している。

外国人の個人地位法は、法廷が外国人の国内法律問題を解決するために、外国人訴訟当事者の国内法を適用することも義務付けている。この例外にもかかわらず、シャリーアの原則に基づいて、この法律が非イスラム教徒に適用され、その結果、彼らの宗教独特の規則をくつがえす場合がある。たとえば、法律は、イスラム教の女性の非イスラム教の男性との婚姻を禁止している。また、遺産の分配において、女性が受け取るのは男性が受け取るものの半分である。これらの規定は、性別あるいは宗教に基づく差別なく、法律の下、平等な保護を保証する憲法の第 14 条と矛盾すると考えられる。この問題に関し、どの法廷もまだ裁決を下していない。

憲法の第 92 条は、最高裁判所は何人かの裁判官、イスラム教法律学の専門家、法律学者によって構成されるものとする規定している。法律が、裁判所の数、選抜方法、任務を規定することになっている。この報告書が扱う期間の終わりの段階で、そのような法律は制定されておらず、イスラム教法律学の専門家が裁判官のコンサルタントおよび顧問として任務を果たすのか、裁判所の一員として任務を果たすのかという問題は未解決のままである。

宗教の自由に関する制限

政府の政策および慣行は、通常、宗教の自由な実践に干渉しなかったが、進行中の反乱は、あらゆる宗教信者がそれぞれの宗教を実践することを大きく阻害した。さらに、治安維持組織内の公的権限の宗派による濫用が、自由に礼拝する市民の権利を妨げた。

政府は、宗教観あるいは宗教教義の解釈に基づく政党の結成を制限しなかった。

宗教グループは、政府への登録を義務付けられている。登録するためには、グループは国内に最低 500 人の信者がいなければならない。キリスト教および他の宗教の基金によると、国内で活動している外国人宣教師の数に関する信頼できる情報はなかった。

学生は、通常、学校においてそれぞれの宗教の基本を実践することを禁止されていなかった。しかし、この報告期間中、一部の学校の非イスラム教少数派および宗教に関係のないアラブ人は、保守的なイスラム教の実践を守ることをますます強要されていた。Basrah の教育長官は、すべての学校の女性に頭を覆うように義務付け、Mosul のすべての女子大生は、非イスラム教徒であっても、ヒジャーブ (hijab) すなわちヘッドスカーフを着用するように義務付けられた。

女性問題省は、かなりの男性の政府職員、警察官、イスラム教聖職者が、これらの男性が女性と話をする前に彼女たちに覆いをするようにしばしば要求していると報告した。

宗教の自由の悪用

公務員が宗教の自由に対する個人の権利の悪用に手を染めたり、許容したりすることは、公式の政府の政策に反することである。しかし、この報告期間中、政府はその資源と注意のほとんどを進行中の反乱と復興努力に集中した。したがって、宗教の自由の悪用に関連した問題に取り組む力がなかった。さらに、治安部隊の能力と法の支配の欠如が、イラク治安部隊 (ISF) あるいは司法制度が申し立てのあった違反を調べる、あるいはそれに取り組むことを困難にした。

多くの人は、引き続き起きている国内での高い暴力水準、特に、2006 年 2 月 22 日の Samarra の al-Askariya 聖廟「黄金のモスク」の爆破後の宗派がらみの暴力の急激な高まりを、宗派対立の種を蒔こうと企てたテロリストのせいだと考えた。Samarra 爆破の結果、どの程度の暴力が、犯罪要素というより宗教的なつながりによるものであるかを判断するのがますます難しくなった。政府は、2006 年 9 月のローマ法王ベネディクト 16 世のイスラム教に

関する異論の多い発言の公開の朗読に対して、衝撃を受けたと述べた。この発言は Basrah でのデモと、アル・カーイダ・イラク (AQI) に結びつくテロリストグループによって、「十字架の信奉者」に対する戦いを開始するとの、インターネット上での公開の誓いを引き起こしたといわれている。

スンニ派アラブ人社会は、彼らのモスクや宗教的な場所への警察による踏み込みを、シーア派支配の政府による攻撃の例としてしばしばあげた。主としてシーア派の多い Baghdad の東側のスンニ派が支配的な地域、Fadhil 地区の住民によると、2007 年 4 月 10 日、その地域のモスクの踏み込みの際、イラク軍は、朝の祈りの時に、他の礼拝者の前で 2 人を殺害した。住民の 1 人が、死亡した人の 1 人は、モスクの拡声器から祈りを捧げる人たちに信心深い行動をとるように呼びかけていたモスクの muezzin (礼拝の呼びかけを行なう人) であったと言及した。

クルド地方政府 (KRG) が、宗教的少数派に対して差別的な行動を取っているとの訴えがあった。Mosul の北に住むキリスト教徒は、KRG が彼らの所有地を補償なしに没収し、その土地に入植地を作り始めたと主張した。この報告期間中、アッシリア・キリスト教徒は、クルド民主党 (KDP) 支配の司法制度が日常的に非イスラム教徒への差別を続け、彼らに有利な審判を下せないでいると訴えた。このような訴えにもかかわらず、多くの非イスラム教徒は、イスラム教の教えの狭義の解釈に公に従わせようとする圧力がより強い国の中部、南部のさらに不安定な地区から、イラク北部に逃れた。しかし、移民統計資料はなかった。

イラクのアルメニア教会は、前政権によって強制的に売却させられた所有地を取り戻すために、政府職員と共に努力した。協会は、Mosul、Basrah、Kirkuk、Baghdad、Dohuk の 6 つの所有地に対して公正な市場価値を支払われたが、圧力の下、所有地を強制的に売却させられた。しかし、教会職員は、所有地の請求に関する政府との議論が、この報告期間中、まったく成果をあげていないと述べた。

国内に宗教に関する囚人あるいは拘留者の報告はなかった。

強制的改宗

米国から誘拐された、あるいは違法に連れ去られた未成年の米国市民の強制的改宗、あるいはそのような市民が米国に戻ることを拒否した報告はなかった。しかし、サービア・マンダ教徒は、イスラム過激派がイスラム教への改宗を拒んだ彼らのメンバーを脅し、誘拐し、殺害したと報告した。キリスト教徒も、Baghdad の Dora 地区に住むキリスト教徒が、

改宗するか、立ち去るか、あるいは殺されるかとイスラム過激派に警告されたと報告した。

反ユダヤ主義

反ユダヤ主義的感情は、この報告期間中、強く残っている。たとえば、2006年7月、Mahmoud al-Mashhadani 連邦議会議長は、ユダヤ人がシオン主義の計画を進めるために、国内で暴力活動に資金提供していると非難した。政府高官は誰も彼の発言を非難しなかった。さらに、かつて Baghdad の重要な存在であった、国内の 2,700 年に及ぶユダヤ人社会は、現在、ほとんど存在していない。

テロリスト組織による迫害

犯罪集団、テロリスト、反乱勢力が罪を受けずに市民を犠牲者にする全体的な無法状態が、あらゆる民族、宗教グループの人に影響を与えたが、さまざまな宗教グループ内の多くの個人が、彼らの宗教的アイデンティティあるいは世俗的学問によって攻撃目標となった。個人は、嫌がらせや脅迫だけでなく、誘拐、そして殺害の被害者でさえあった。女性や少女は、hijab を着用するのを拒むこと、西洋スタイルの洋服を着ること、あるいは大衆の行動を決定する保守的なイスラム教の規範の厳密な解釈を十分に守らないことで、しばしば脅された。この報告期間中、キリスト教徒を含む多くの女性が、hijab を着用しないことで嫌がらせを受けた後、安全のために hijab を着用することに決めたと報告した。あるサービア・マンダ教徒の女性は、hijab を着用しないことで、酸を顔にかけられたと報告した。

2007年6月20日、シーア派民兵組織のメンバーと疑われる人物が、Baghdad の南、Haswa のスンニ派モスク内部で、爆弾を爆発させたといわれている。警察によると、数時間後、Hillah 近くのモスクを襲撃者が襲い、モスク近くのイマームの家を目指したが、襲撃が来るのを見て、聖職者は逃げた。スンニ派モスクの爆破は、2007年6月19日のシーア派の Khulani モスクへのトラックによる自爆攻撃の報復のようである。

また、2007年6月20日、警察によると、Iskandariyah でスンニ派モスクが爆弾攻撃による小規模の被害を受け、Baghdad の南、Jbela での爆弾攻撃で別のスンニ派モスクが大きな被害を受けた。

2007年6月19日、アル・カーイダと疑われる爆破犯人が、0.5 トンの爆発物を積んだトラックを Baghdad 中央のシーア派 Khulani モスクに衝突させ、87 人を殺害し、242 人を負傷させたといわれている。

2007 年 6 月 16 日、目撃者と治安当局者は、黒い衣装でフードを被った武装勢力が、モスクにいた警察官に逃げようと命令した後、Basrah のスンニ派の Ashrah al-Mubashra・モスクを爆破したと述べた。国内でもっとも崇敬されているシーア派の宗教指導者、The Grand Ayatollah Ali al-Sistani 師は、Talha Bin al-Zubair と Ashrah al-Mubashra のモスクの襲撃を責め、非難し、あらゆる市民に、最善の力で、すべての聖廟およびモスクに対するそのような攻撃を防ぐように訴えた。

2007 年 6 月 13 日に起きたもっとも神聖なシーア派聖廟の 1 つである Samarra の Samarra 聖廟の 2 つの光塔の破壊の明らかな報復として、2007 年 6 月 15 日、Basrah のスンニ派の Talha Bin al-Zubair モスクが爆発で破壊された。襲撃は、全国で報復のための宗派による暴力の波を誘発した 2006 年 2 月 22 日の聖廟の黄金のドームの破壊と同様のであった。

2007 年 6 月 13 日、Asakariya 聖廟の襲撃の後、襲撃者が Baghdad の Bayaa 地区のスンニ派の Khudair al-Janabi モスクに火を放ったといわれており、反乱勢力は、Baghdad の北の Khalis のシーア派聖廟、Imam Ali Kamal 内部に爆弾を仕掛け、建物を完全に破壊した。

2007 年 6 月 9 日、武装した集団が Bayaa にあるスンニ派の Fatah-Basha モスクを爆発した。米国軍によると、負傷者はなかったが、モスクはかなりの被害を受けた。

2007 年 6 月 3 日、正体不明の武装勢力が、Mosul のイラク人司祭、Ragheed Ganni 神父と 3 人の助祭を、ミサをあげて帰る際に撃ち殺した。

2007 年 6 月 3 日、武装勢力が、西 Baghdad の al-Khadhraa 地区のスンニ派モスクのイマーム、Sheikh Ali Khudher al-Zand を殺害したといわれている。

2007 年 5 月 28 日、Baghdad の Abdul Qadir Gilani モスク近くで爆弾が爆発し、少なくとも 20 人が殺害された。モスクのイマームは、モスクも深刻な被害を受けたと述べた。

2007 年 5 月 4 日、Baghdad のスンニ派が支配的な地区、Adhamiya で 3 人のスンニ派信者の遺体が発見された。同日、その地区のはずれ近くのシーア派モスクが、モスク警備員を誘拐した反乱勢力によって焼かれたといわれている。

2007 年 4 月 28 日、Karbala にある Abbas Ibn Ali のシーア派聖廟の近くで、自動車自爆テロ犯が 60 人を殺害し、170 人の負傷者を出した。

2007 年 4 月 22 日、イスラム教のクルド人男性と関係を持ったことで、仲間のヤジードー教徒によって殺害されたヤジードー女性への投石に対する報復として、Mosul で武装勢力がヤジードー社会の 20 人以上のメンバーをバスから引きずり出し、撃ったとの報告があった。これらの死は、2006 年 4 月 20 日に暗殺された Ninewa 県評議会のメンバー、Hasan Nermo 氏を含む、前回の報告期間に殺害された 11 人のヤジードー教徒に続くものであった。

2007 年 4 月 28 日、イスラム教の預言者 Muhammad の孫が埋葬されている、シーア派のもっとも重要な聖地の 1 つである、Karbala の Imam Hussein 聖廟近くで爆弾が爆発した。この襲撃で 50 人以上が殺害された。前回の爆発は 4 月 14 日に起き、礼拝者が夕拝に集まっている時、聖廟から 200 メートルの所で自動車爆弾が爆発し、56 人を殺害し、少なくとも 70 人を負傷させた。

2007 年 3 月 29 日、別々の襲撃が、Baghdad の Shaab 地区と Baghdad の北、Khalis の込み合ったシーア派の市場を狙った。Baghdad の自爆テロと Khalis の同時自動車爆破テロは、少なくとも 119 人を殺害し、171 人を負傷させた。

2007 年 3 月 28 日、前日の Tal Afar の爆破の報復として、al-Mahdi 軍 (JAM) 民兵組織の武装勢力が、Wahda (Tal Afar のスンニ派トルクメニスタン人地区) の家々を襲い、70 人を殺害、40 人を誘拐し、30 人を負傷させたといわれている。2007 年 3 月 27 日、Tal Afar の殺戮は、85 人を殺害し、他 183 人を負傷させたといわれている地元の市場で爆発したトラック爆弾の結果であった。スンニ派とイラク・アル・カーイダ系のイラク・イスラム国 (ISI) は、自分たちの犯行であると主張した。

2007 年 3 月 12 日、Diyala の主にシーア派の地区の少なくとも 31 軒が、ISI とつながりのあるスンニ派反乱勢力によってガソリンをかけられ、焼かれた。

2007 年 3 月 10 日と 3 月 11 日の 2 つの自動車爆弾は、アルバイン (Arbaveen) の祝日で Karbala での礼拝から Baghdad に戻る 30 人以上のシーア派巡礼者を殺害した。

2007 年 2 月 24 日、トラック爆弾が Habbaniyah のスンニ派の Hay al-Ummal モスク近くで爆発し、約 40 人 (モスクの中でお祈りをしていた 15 人を含む) を殺害し、多数を負傷させた。襲撃は、モスクのイマーム、Mohammad al-Marawi 師がイラク・アル・カーイダに対して断固として立ち向かうように礼拝者に訴えた 1 日後に起きた。イラク・アル・カーイダからの警告にもかかわらず、Habbaniyah の女性は、hijab の着用を強制されなかった。

2007 年 2 月 15 日、既婚のクルド人女性と同じ車に同乗したのを目撃された 2 人のヤジードゥー男性に対する報復といわれるもので、多数のクルド人が Nineveh 県の Shaikhan のヤジードゥー地区を襲撃し、私有財産とヤジードゥーの文化的建造物に損害を与えたといわれている。

2007 年 1 月 30 日、イランとの国境近郊の Mandali のシーア派モスクに入っていく群衆を自爆テロ犯が襲い、19 人を殺害し、54 人を負傷させた。

2006 年 12 月 30 日、Khalis の自爆テロ犯が、Khalis のシーア派モスクの指導者でシーア派聖職者の Sheik Kadhim Hameed Qassim 師を、金曜の礼拝の後、自宅に着いた時に殺害した。当局者は、自爆テロ犯を含む 10 人が死亡し、他 15 人が負傷したと報告した。

2006 年 12 月 30 日、イラク軍兵士が、Baghdad の西地区の Al-Hussein モスクへのテロリストによる襲撃に応戦し、テロリストは被害を加える前に逃げたといわれている。

2006 年 12 月 26 日、Baghdad の Adhamiya 地区のスニ派の Abu Hanifa モスクの外の自動車爆弾が、少なくとも 20 人を殺害し、35 人を負傷させたといわれている。

2006 年 12 月 4 日、警察によると、Baghdad の北、バラド近郊の Yathrib の町のスニ派モスクのイマームが、武装勢力によって誘拐された。

2006 年 11 月 25 日、武装した反乱勢力が、ガス容器を投げ入れ、Baghdad の Hurriya 地区のスニ派の Al-Nidaa モスクに火をつけたといわれている。モスクは、煙と火の被害を被ったが、破壊はされなかった。

2006 年 11 月 23 日、3 台の自爆車両と 2 発の迫撃砲を使い、スニ派アラブ人の活動家と疑われる人物が、Baghdad のシーア派が多いサドル市に同時攻撃を行い、約 140 人を殺害し、200 人以上を負傷させたといわれている。約 30 人の反乱勢力による、北 Baghdad のシーア派運営の保健省本部の 2 時間にわたる立てこもりの後、この同時爆破が続いた。この爆破に対する反応として、シーア派の民兵グループが、Baghdad のもっとも神聖なスニ派聖廟の 1 つの Adhamiya の Abu Hanifa モスクに 10 発の迫撃砲を撃ち、1 人が死亡し、7 人が負傷したといわれている。

2006 年 9 月 27 日、警察によると、Baghdad の Hurriya 地区のスニ派の al-Mashahada モスクで、武装勢力が夕拝に参加している礼拝者を銃撃し、少なくとも 10 人が死亡し、11

人が負傷した。

2006 年 9 月 24 日、キリスト教指導者によると、Baghdad の al-Riyadh 地区のアッシリア古代東方教会の聖マリア大聖堂（アッシリア古代東方教会の総主教、Mar Dinkha2 世の家）が、日曜ミサの後、礼拝者が教会から立ち去ろうとした時、手榴弾と車両爆弾で襲撃され、2 人が死亡し、少なくとも 17 人が負傷した。

2006 年 9 月 12 日、警察によると、月曜日の深夜、反乱勢力が Diyala 県の Baquba の南、Khan Bani Saad のシーア派モスクを襲撃し、7 人を殺害し、4 人を負傷させ、迫撃砲でモスクを破壊した。

2006 年 8 月 10 日、世界中でもっとも神聖なシーア派聖廟の 1 つ、Najaf にあるシーア派の Imam Ali モスクの前の自爆テロで、イラク軍によると、少なくとも 35 人が殺害され、少なくとも 122 人が負傷させられた。

2006 年 7 月 28 日、ユースセンターとスンニ派の al-Ali al-Aadhim モスクの間に仕掛けられた爆弾が、夕拝の後、礼拝者が立ち去り始めた時に爆発し、警察によると、4 人が死亡し、他 9 人が負傷した。

2006 年 7 月 18 日、自爆テロ犯が、シーア派の聖地、Kufa の Kufa 聖廟の黄金ドーム近くの市場を襲い、地元の病院職員によると、53 人が死亡し、少なくとも 105 人が負傷した。

2006 年 7 月 17 日、襲撃者が数台の車両爆弾を爆発させ、AK-47 とロケット手榴弾で武装された車両に乗り、Baghdad の南、Mahmoudiya の町の群集に向かって撃った。イラク・アル・カーイダは、近くのモスクに掲げた、襲撃が JAM に対する復讐であると書いた看板によって、自分たちの犯行であると主張した。

2006 年 7 月 14 日、爆弾が、Baghdad 北部のスンニ派モスクで、礼拝から帰る 14 人を殺害し、5 人の礼拝者を負傷させた。同日、警察によると、Baghdad の北東 45 マイルの Balad Ruz のシーア派の Imam Al-Hussein モスクの近くに 5 発の迫撃砲が落とされ、2 人が死亡し、6 人が負傷した。

2006 年 7 月 7 日、Baghdad 北東の al-Furqan スンニ派モスクを狙った爆弾が、通りがかりの人を負傷させた。また、道端に置かれた爆弾が、Baghdad 北東、Baquba の Ahmed bin Hanbal スンニ派モスクを立ち去ろうとする礼拝者 1 人を殺害し、5 人を負傷させた。Sinjar で、礼拝が終わろうとしている時に、シーア派モスクの近くで自動車爆弾が爆発し、8 人が

死亡し、48 人が負傷した。

2006 年 7 月 6 日、南部都市の Kufa のシーア派聖廟で、主にイランの巡礼者の 12 人が、自動車自爆テロ犯によって殺害された。

この報告期間中、サービア・マンダの指導者は、彼らのコミュニティがますます標的になっていると報告した。サービア・マンダ女性の強制的な改宗および hijab の着用に加え、23 人のサービア・マンダ教徒の誘拐、そのうち少なくとも 9 人は身代金目的であったと報告した。9 件すべて、身代金は証拠に残っていない額が支払われたが、9 人の誘拐された人のうち 7 人のみが解放され、他の 2 人の状態に関する詳しい情報はない。イスラム過激派が多くのサービア・マンダ教徒を脅し、イスラム教への改宗を拒んだ少なくとも 5 人が殺害されたとも報告した。

この報告期間中、イスラム過激派が、少なくとも 9 人の司祭を含むキリスト教徒を身代金目的で誘拐したとの報告もあった。

2006 年 7 月 17 日、カルデア人の司祭が Baghdad で誘拐され、2 日後に解放された。

2006 年 8 月 15 日、カルデア人の司祭が Baghdad で誘拐された。司祭は拷問を受け、1 カ月後に解放されたといわれている。

2006 年 9 月 16 日、カルデア人の司祭が Baghdad で誘拐され、2 日後に解放された。

2006 年 10 月 11 日、アッシリア人の司祭、Paulos Iskender 神父が誘拐され、1 週間後に Mosul で首を切られた。神父は、ローマ教皇ベネディクト 16 世が 2006 年 9 月に行った発言の報復で狙われたといわれている。

2006 年 11 月 19 日、カルデア人の司祭が Baghdad で誘拐された。司祭は 9 日後に解放された。

2006 年 11 月 26 日、Mosul の the National Presbyterian Church からのプロテスタント牧師、Elder Munthir Al-Saqa は、その日、彼の教会で日曜礼拝を執り行った後に誘拐された。牧師は、11 月 29 日に遺体で発見された。誘拐犯は、彼の携帯電話を使い、Elder Munthir の家族に 100 万ドルの身代金を要求したといわれている。

2006 年 12 月 4 日、カルデア人の司祭が Baghdad で誘拐され、6 日後に解放された。

2007 年 5 月 19 日、カルデア人の司祭が Baghdad で誘拐され、2 日後に釈放された。

2007 年 6 月 6 日、カルデア人の司祭、Hani Abdel Ahad と他 5 人のキリスト教徒が Baghdad で誘拐された。5 人のキリスト教徒は 1 日後に解放され、Hani 神父は 2007 年 6 月 17 日に無事、解放された。カルデア教会は、誘拐犯が身代金を要求したことを認めたが、その額に関するコメントは控えた。

国の内外のキリスト教指導者は、彼らの Baghdad コミュニティ、特に Dora 地区のメンバーが、キリスト教徒は立ち去るようにと要求する、あるいは殺害するとの脅迫状を受け取ったと報告した。報道で、キリスト教指導者は、2007 年 4 月と 5 月の間に、500 世帯が Dora 地区を離れたと述べており、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は、少なくとも 100 世帯が Dora から逃れたのを確認したといわれている。

スンニ派、シーア派双方への宗派がらみの攻撃の規模も、すべてを把握するのは難しいが、非常に大きかった。

イラクの移民難民省は、その推定によると、2003 年以来、ほぼ半数の国内少数派コミュニティが他の国に避難したと、2007 年 1 月に言及した。2007 年 1 月の匿名の UNHCR 情報は、180 万人と考えられるイラクの難民の 30 パーセントを少数派が占めていると報告した。その情報は、シリアだけでも、2003 年 10 月から 2005 年 3 月の間に到着した推定 700,000 イラク難民の 36 パーセントが、宗教上の少数派のメンバーであったと言及した。

加えて、国際移住機関（IOM）によると、2006 年の終わりまでに、国内に 150 万人の国内避難民がいた。この報告期間中、多くの家族が襲撃を恐れ、多様な宗教、民族がいる地区から逃れ、IOM 報告書は、2006 年に約 247,000 人が国内に避難したとしている。国内避難民の 64 パーセントがシーア派イスラム教徒で、28 パーセントがスンニ派イスラム教徒、7 パーセントがキリスト教徒、1 パーセント以下がヤジディー教徒で、1 パーセント以下がサービア・マンダ教徒であった。

非イスラム教徒を目標とすることに加え、テロリストは、この報告期間中にスンニ派、シーア派両コミュニティを脅し、攻撃し続けた。シーア派、スンニ派双方は、2006 年 2 月の al-Askariya モスクの襲撃後、彼らの住んでいる地区から立ち去るようにと要求する殺害の脅迫状を受け取ったと報告した。シーア派とスンニ派の人々は、脅迫を避けるために自宅を離れたといわれている。大多数の人は、親族のところ、あるいは宗教コミュニティの支援ネットワークを通して避難したが、一部の人は国内避難民キャンプで生活していた。

イラク移民難民省は、2006 年 2 月の al-Askariya モスクの襲撃後、11,000 世帯が自分の家を離れたと、2006 年 4 月に推定したが、その一方、IOM は、6,500 世帯が自分の家から逃れたと推定した。IOM は、推定には家族あるいは友人のところに保護を求めた人が含まれていないことに言及し、政府の数字に異論を唱えなかった。2006 年 2 月と 3 月の間、Baghdad の Dora 地区のある住人は、民兵組織が兄弟を殺害し、ドアに、「この地区から出て行け、さもなければお前の首を切る。お前たちシーア派は裏切り者でアメリカの仲間だ」と書かれた張り紙を残された後、妻と 4 人の子供と共に自宅から逃げた。家族は、Mansour 地区の放置された体育館に避難した。

2006 年 3 月、シーア派の農民と彼の 7 人の家族が、Baghdad の南の Latifiya の村に留まったら家族を殺害すると覆面をした活動家に脅された後、自宅から逃れたといわれている。その家族と別の避難した人たちは、Najaf の放棄されたホテルに無断で住み着いていたといわれている。

2006 年 4 月の間、スンニ派の人々は、脅迫するメールと携帯電話のカメラで撮られたビデオを受け取ったといわれている。その 1 つは、Baghdad の主にシーア派の地区に入りこんだスンニ派のイラク人の男性が、黒い衣装の男たちに殴られ、殺害されるシーンが映されている。ビデオは、その地区に入りこむいかなるスンニ派にも同じことが起きるとの警告と共に発信された。

反乱勢力が、スンニ派とシーア派地区のモスクを襲撃し、両宗派の聖職者、宗教指導者、一般市民を殺害した。たとえば、2007 年 6 月 6 日、3 人の身元不詳の武装した男たちが、シーア派の最高聖職者、Grand Ayatollah Ali al-Sistani 師の代理人、Sheikh Raheem al-Hesnawi を Najaf の彼の家の前で撃ち殺した。Al-Hesnawi は、南 Najaf の al-Mekhshab 地方の著名なシーア派聖職者であった。さらに、2007 年 6 月 3 日、武装勢力が、西 Baghdad の al-Khadrhaa 地区のスンニ派モスクのイマーム、Sheikh Ali Khudher al-Zand を殺害した。この種の事件の正式な死亡者数はなかったが、個々のケースが、この報告期間の終わりを通して、引き続き報告された。

2004 年と 2006 年の間に、イスラム教武装勢力は、彼らがイスラム教と矛盾すると考える商品あるいはサービスを提供していることに対し、店の経営者に嫌がらせをし、時には、そういった活動を止めるようにとの警告を守らないことに対して、経営者を殺害した。主にキリスト教徒とヤジディー教徒の酒類販売店主が、特に標的となった。Baghdad, Mosul, Basrah の酒類販売店は、爆破、略奪、破壊された。Baghdad のアッシリア人経営の 50 以上の酒類販売店は、イスラム過激派の脅迫で店を閉めた。キリスト教指導者は、映画館、

レストラン、酒類販売店のキリスト教オーナーが、この報告期間中に標的となったと立証したが、各事件の詳細な情報はなかった。

カルデア人の聖職者は、「過去 2 カ月、多くの教会が十字架をドームから撤去させられた」と 2007 年 4 月に報告した。たとえば、イスラム過激派が、Baghdad の聖ジョージ教会の屋根に上り、十字架を撤去した。Baghdad の Dora 地区にあるカルデアの聖ジョン教会では、教区民たちが、再三の脅迫の後、十字架をより安全な場所に移すことに決めた。

2007 年 1 月、カルデア総主教庁は、主要なカルデアの神学校で、国内唯一のキリスト教神学学修の大学である Babel 大学を、キリスト教徒に対する誘拐と脅迫があった後の数カ月の閉鎖の後、Baghdad の Dora 地区から Irbil 近郊の Ankawa へ正式に移転した。2006 年 9 月から 12 月の間、神学校の学長と副学長が Baghdad で誘拐され、共に 1 週間後に釈放された。

信教の自由に関する進歩と前向きな展開

脆弱な治安環境ならびに反乱との戦いと国のインフラ作りへの政府の没頭にもかかわらず、この報告期間中、政府は、宗教の自由に関して前向きに前進した。

この報告期間中、政府指導者は、テロと対決するためにすべての市民が、宗教的志向にかかわらず、団結する必要性を説いた。政府指導者は、あらゆる宗教グループと民族に対する平等な処遇の公約をしばしば強調した。政府は、反乱勢力の拠点として使用された場合、モスクや宗教指導者の自宅を攻撃の対象から除外しないということも明確にした。

政府は、宗派がらみの暴力すべてを公に非難し、国内の宗派間の団結を繰り返し呼びかけた。

政府は、バハーイー教を名乗る者に対する国籍 ID カードの発行を禁止する 1975 年の規則 358 号を取り消した。

すべての宗教グループの宗教指導者は、反乱勢力によって行われたテロ行為を非難し、国内の宗教コミュニティに報復しないよう、また、共に暴力を終結させるよう促した。

約 55 人のスンニ派、シーア派、キリスト教徒、クルド人、ヤジーディー教徒の宗教および部族の名士が、2007 年 6 月 11 から 12 日の 2 日間の Iraqi Inter-Religious Congress conference の協議会に出席し、国内の暴力削減を要求する宗教協定を作り上げた。小会議

で、マリーキー首相は、この会議の将来の活動に対する強力な支援を代表団に表明した。

セクション III 社会的虐待および差別

保守的および過激なイスラム教分子は、イスラム教の教えの彼らの解釈に従うように、社会に対してすさまじい圧力をかけ続けた。これは、スンニ派、シーア派双方の非宗教的な人々に影響を与えているが、非イスラム教徒は、その少数派としての地位と部族組織の保護の欠如によって、圧力と暴力に対して特に弱かった。たとえば、サービア・マンダ教徒は、サダム政権の崩壊以来、ますますイスラム過激派勢力の攻撃目標になりやすくなったと報告した。これは、彼らの数が少なく、小さなグループで全国に散らばって生活していて、非暴力が彼らの宗教の重要な教義のために自分たちを守ることができないからである。サービア・マンダ教徒は、Basrah で「スンニ派とスバ（サービア・マンダ教徒の俗語）は出て行け」と書かれたちらしが 2007 年 6 月に Basrah で撒かれたと報告した。同様のちらしが、2007 年 5 月 Nassriya で、2007 年 6 月 Baghdad の Hay Al Amil 地区で撒かれたといわれている。

スンニ派イスラム教徒は、全般的な差別があると訴え、それが前政権下のスンニ派のいわれている有利な地位とシーア派への虐待に対するシーア派多数派による復讐であると主張し、また、それだけでなく、反乱勢力が主に、スンニ派の大多数がおそらく理解を示していると思われる、スンニ派過激派と前政権分子で組織されているとの大衆の認識のせいであるとした。スンニ派コミュニティの一部は、反乱勢力を支持し、援助さえしているが、多くは非スンニ派教徒同様声高にテロを非難した。

非イスラム教徒、特にキリスト教徒は、宗教的な違いから、イスラム教多数派によって孤立させられていると不平を訴えた。国民議会での統計的につりあった代表数にもかかわらず、多くの非イスラム教徒は、代表者選出権を奪われ、彼らの利益が十分に反映されていないと述べた。

多数派イスラム教徒のメンバーによる差別的な雇用慣行、非イスラム教徒企業に対する攻撃、全体的な法の支配の欠如の組み合わせも、非イスラム教徒コミュニティに不利な経済的影響を与え、大多数の非イスラム教徒の国外脱出の一因となった。

セクション IV 米国政府の政策

米国政府は、人権を促進するための全体の政策の一部として、宗教の自由を促進し、それに関し引き続き政府と緊密に連携をとる。国務長官を含むあらゆる地位の米国政府職員は、

宗教の自由に関する問題について、政府と定期的にかかわった。それは、宗派がらみの暴力に際して団結を呼びかける公式声明、政府高官や宗教指導者とのハイレベル会合、政府や宗教組織の代表に少数派を含めるよう促す実務者レベルのやりとりのかたちで行われた。

この報告期間中の米国大使館のもっとも重要な焦点は、宗派がらみの暴力を減少させることと、政治および憲法作成過程にスンニ派および非イスラム教徒の統合を強化させることであった。米国は、非宗派の団結した政府を強く主張し、スンニ派を政治過程に参加させる法律の可決を促し、スンニ派指導者に技術援助を提供することによって、スンニ派の政治過程への統合を強めるよう努めた。

The Iraqi Institute of Peace, (IIP) は、宗教の自由問題を議論するために、緊張の度合いが高い地区の部族指導者、高位聖職者、コミュニティのリーダーと、定期的に会合を持っている。

2007 年 9 月 14 日公表